

入院原因疾患別に分析した転倒転落事例の特徴

Characteristics of fall incident analyzed by cause of hospitalization

○加島 知明¹、酒井 康子²、山口 充代²、地蔵 かおる²、志賀 祝子²、田中 雅博³

¹社会医療法人 三和会 永山病院 リハビリテーション部、

²社会医療法人 三和会 永山病院 看護部、³社会医療法人 三和会 永山病院 整形外科

【はじめに】

当院で発生した転倒転落事例の実態を把握し、今後の予防策立案の一助となるよう、入院原因疾患別にインシデントレポートから転倒転落要因を分析したので報告する。

【方法】

2018年から20ヶ月間に各病棟で発生した転倒転落に関するレポートを後方視的に調査した。入院原因疾患は内科、外科、脳神経外科、整形外科に分類した。レポート及びカルテ情報より、年齢、性別、転倒の種類、入院からの日数、時間帯、発生場所、転倒転落アセスメント点数および危険度、転倒時の移動能力を調査した。

【結果】

疾患別件数は、内科が143件と多く、次いで整形外科81件であった。年齢は内科と整形外科の80%以上が75歳以上であった。性別は外科以外女性が多かった。転倒の種類はベッドからの転落が全疾患で最も多く、次いで歩行時の転倒が多かった。入院からの日数は、内科、外科の40%以上が1週間以内に転倒しており、他の疾患と比較して多い傾向を示した。時間帯は夜間帯が68.5～76.9%と高率であった。インシデントレベル3bの9件中7件も夜間帯であった。発生場所は自室が最多であった。転倒転落アセスメント点数は16～18点が34.6～51.4%であったが、整形外科のみ14～20点が75.3%であった。危険度はⅢが60%以上であった。転倒時に移動が自立している患者は3.8～12.3%であり、移動に何らかの介助を必要としている患者が多かった。

【考察】

内科、外科はベッドからの転落や歩行中の転倒が多く、入院1週間以内が多いという傾向を示した。これはせん妄や入院後に投与される薬剤の影響によるふらつきが原因と考え、今後は薬剤師による介入も必要と考える。

整形外科ではアセスメント14～20点での転倒が多く、歩行自立となった後にも生じるという傾向を示した。全介助レベルでの転倒転落は少なく、患者自身による自己能力の過信や、職員への気遣いが原因と考え、スタッフ間の情報共有や患者への注意喚起の徹底が必要と考える。

現在、当院では転倒予防チームとして病院一律での対策を講じているが、今回の結果から、入院原因疾患を考慮した対策も実施していく必要があると考える。まずは疾患特有の転倒転落の傾向について転倒予防チームのスタッフが中心となり、病棟スタッフにも共有してもらう必要があると考える。